

“that fool of a man” 及び類似表現について

山川喜久男

I

(1) “that fool of a man” 及び類似表現について

およそ当該の言語社会に通用している言語表現で、構造上または意味上で特異な様相を帯びるものは、それに相当する普通の形式に比べ、独特な表現価値を擔うものであることが、通例である。たとえそれが現實の言語生活の中に慣用化し、その價值が特に意識されないものとなつているとしても、少なくともその發生の當初には、従来の形式とは別な新しい存在理由が認められたものと考えてよい。こゝに取上げた英語の “that fool of a man” という表現は、その表面上の意味において “that foolish man” と同等であるように言われるけれども、明らかに構造と意味とが則應していないこの表現法には、意味に則した普通の “that foolish man” とは違

つた特異性のあることに、注意しないわけには行かない。一般に「(代)名詞+前置詞+(代)名詞」の結合形式にあつては、例えば the book on the desk, the waiter in the well, one of them などにおけるように、前置詞の後の(代)名詞は前置詞と一緒になつて、前の(代)名詞を限定する意味關係が表わされる。前の(代)名詞は語群全體の主要語であり、それに續く「前置詞+(代)名詞」は從屬的な付加語の關係にある。つまり前置詞の中にはさむ名詞的表現は、「被限定語+限定語」の構造を持つと言へる。ところが that fool of a man では、一見被限定語が構造上の fool ではなく、構造上限定語に屬する man であるように思われる。

このような構造と意味との間の矛盾を見極めるには、まずこの統語様式の樞要な地位にある前置詞 of の機能

を考えてみる必要がある。of の前後に置かれる名詞がそれぞれいかなる種類のものであるかを考察する上にも、of の機能を明らかにすることが先決問題である。of の後の名詞に不定冠詞が添われていることが、また形式上注意を引く点であるが、この不定冠詞の本質も解明されなければならぬ。こうして構造の各素因の性質を究め得たならば、次にその意味の表現法と現實の文脈に鑑み、この種の形式の持つ文體上の價值を探ってみる段階となる。以下これらの諸点を、なるべく具體的な文例に徴し、また關連のある他の表現を参照しながら、逐次検討して行きたいと思う。

II

“that fool of a man” などにおいて、構造に則しないいわば反論理的な意味關係の名詞を結合している of は、文法家によって「同格關係」を示すものと説明されるのが普通である。イエスベルセン⁽¹⁾はこの of を「同格の of」(“Appositional of”)と呼び、カーム⁽²⁾は of 以下の句を「同格的屬格」(“Appositive genitive”)と稱し、嚴格な歴史的觀點に立つコッホ⁽³⁾は、問題の形

式を「同格」(“Apposition”)の表現を含むものの一種として扱っている。これらの學者が「同格」と言うのは、“that fool of a man” の of に導かれ構造上從屬的地位にある (a) man が (that) fool に對し、意味上同格の關係にあるというわけである。つまり of には何等確とした種類の意味關係を示す機能がなく、もとの構造は、あたかも二つの名詞が of の介在を経ることなしに、“that fool a man” と並置された場合と同じ意味を表わすということになる。いかにも今日最も普通な英語の前置詞として雑多な關係を示すに用いられる of が、それ自體の語原的な “off, away from” の意味を著しく弱めていることは事實である。また New York City と言うのに對し、the city of Rome などと言う場合の of は、同格を示していると言うことができる。しかし注意したいのは、この場合でさえも、the city of Rome の of は特定のな意味を添えていることが city の前の定冠詞の用法から窺われる点である。表現上 of による迂言法によつて以上、他義的にせよ、of にはそれだけの機能が暗示されていると言るのである。そして that fool of a man のような特異な表現價值を持つ形式にあ

(3) “that fool of a man” 及び類似表現について

つては、構造の衝に當る前置詞の機能は一層意義深いものと考えられる。後に述べるように、發生的な説明を加えているカームはとも角として、一般に文法家がこの表現を「同格」という言葉で處理しているのは、of の微妙な正體を追求し盡しているものとは思われない。

of の機能を明らかにするには、問題の表現に關する發生的な事情を考察してみる必要がある。英語において、現代的なこの種の表現が一般に見られるようになったのは、まず十七世紀の後半以降のことである。しかし外形上これと同一視でき、發生的にその先驅と考えられる表現は、既に十四・五世紀に現われている。それは英語において他の類似的表現法からの類推により自然に生じたものとも思われるが、外國語の影響によって促進されたと思える説が有力である。アイネンケルやモッセはフランス語からの影響を唱えており、事實今日のフランス語に平行的な表現のあることは後に觸れる通りである。しかしその源を更にラテン語にまで遡って説いているカームの言葉は、of の機能に對する起原を明らかにしてくれる點で、注目に値する。カームによれば、英語の a rascal of a man はもとラテン語の scelus viri

に由來すると言うのであるが、virii は vir (= man) の單數の屬格形であり、その意味は「一般に男によって代表される種類に屬する」(“who belongs to the class represented by man”)であり、屬格の機能として本来の所屬關係を示すものであった。このようなラテン語の屬格がフランス語に入つては de により、更に英語に入つては of によって、それぞれ分析的に寫され、フランス語の un coquin d'homme、英語の a rascal of a man という表現を成立させることとなった。今日あたかも無意味な形式語のように「同格」を示すと考えられる of も、このような起原のものであったことを、知らなければならぬ。

次にこの種の表現の英語が文獻に現われた最も早い例を、いくらか眺めてみよう。これらは今日の that fool of a man などに見られる特徴を十分に發揮しているものではないが、それだけ反って起原的な性格を多分に窺わせる。

(1) But swiche a fairnesse of a nekke Haddie that swete that……—Chaucer [Ehnenkel]. (But that sweet had such a fairness of a neck that……)

(2) Here is a *faire body of a woman.* — *The Knight of La Tour-Landry* (c. 1450) [OED].

(3) And he was a *right good knyght of a yonge man.* — *Malory, Le Morte Darthur* (1470—85) [Kell-Inert]. (And he was a *right good knight of a yonge man.*)

(1) のチョーサーの例における *a fairnesse of a nekke* は、結局 “a fair neck” と同義であるけれども、表現の力點が a fair neck におけるやうな neck より、その屬性を表わす fair の方に轉移されていることに注意される。つまり主體に歸屬すべき屬性を主體なみに取り立てて強調する修辭法である。このような修辭法は、敢えて外國語の影響など考えるまでもなく、特に雅文的文體には珍らしくない現象であるが、of は主體に對する屬性の所屬關係を示していることが明らかである。(2) では of の前が body とどう具體名詞が用いられているところから、一層 “a fool of a man” 型に近いやうに見える。しかし of に従う woman との意味の關係を考えると、body は本來それによつて所有されているものを表わしていることが解る。(1) の場合と同様、a faire body

of a woman は a fair woman に代る強調的迂言法であるが、その表現手段として所屬關係を示す of が用いられているのである。(3) は、意味上でも核心をなしているのが、限定句中の man よりはむしろ被限定語の knyght であると言へるから、一層起原的な様相を呈している。後者が前者よりも意味上特殊化されていると、關係が、本來所屬また部分の關係を示す of の介在によつて合理的に表現された例である。

以上十四・五世紀の用例として擧げた三例は、今日慣用化している問題の表現から見れば、未發育の過渡的現象と言ふべきものであるけれども、いずれもラテン語の屬格の機能を受継いだ of の起原的本質を端的に示唆している。

- (1) Jespersen, *A Modern English Grammar* VII. § 9.
- 9.
- (2) Curme, *Syntax* p. 85.
- (3) Koch, *Die Satzlehre der englischen Sprache* § 233. 6.
- (4) Eizenkel, *Historische Syntax* § 150.
- (5) Mossé, *Esquisse d'une histoire de la langue anglaise* p. 99.

III

上述のように十四・五世紀に問題の表現の初期的現象が見られているが、その後一世紀餘を経たシェイクスピアの英語には、當然同類の表現が散見される。まず今日の a fool of a man, a jewel of a cup と對比される次の例が注意を引く。

(1) We lost a jewel of her; and our esteem Was made much poorer by it.—*All's Well that Ends Well* v. iii. 1—2. (彼女という寶を失って、わしの値打ちは一袋と低いものとなった。)

(2) A fool of thee: depart.—*Timon of Athens* IV. iii. 232. (この馬鹿め、あっちへ行け。)

(1) の a jewel of her は her に指られるモノナを寶石と見立て、(2) の a fool of thee は thee で呼びかけられているマゼマンタスを愚者と同一視した、表現法である。その意味では jewel と her' fool と thee とが同格關係にあると言えるのであるが、今日の a jewel of a cup, a fool of a man と次の點で異なっている。後者では of に導かれる a cup, a man は不定一般なもの

を表わす普通名詞であるのに對し、前者では of の次の語は her, thee という特定の個人を指す代名詞となっている點である。シェイクスピアの表現では her, thee の表わす人物は自明のものとし、それについて新たな敘述の内容が a jewel, a fool で傳えられている。つまり表現の構造がまだ意味の關係に則しており、a jewel of a cup, a fool of a man におけるような特異性がないのである。マニンスはこの of を "in, in the person of" の意としてゐるが、本質的にはシヤリットやマホットが註記しているように、構成の素材を示す of につながるものと見るべきである。それは今日でも普通な、

(3) Marry, sir, they praise me and make an ass of me.—*Twelfth Night* v. 1. 20. (だつてあの人たちがほめますから、わたしはばかになっちゃいます。)

におけるような「……から(……を作る)」「……を(……にする)」の關係を示す of の範疇に屬するものである。(2) における a fool of thee も "I have made a fool of thee" という陳述を前提とし、そこから切離され孤立させられた情意的表現と考えられよう。

同じシェイクスピアからの例でも、次に挙げるような

(5) "that fool of a man" 及び類似表現について

現象がむしろ問題の表現における特徴を備えている。

(4) They found him dead and cast into the streets, an empty casket, where the jewel of life By some damn'd hand was robb'd and ta'en away. — King John v. i. 39—41. (彼等はあの方が死んで、生命の寶石がある悪黨の手に奪い去られた空匣(かご)と言った具合に、街にはうり出されているのを發見しました。)

(5) …… a very little thief of occasion will rob you of a great deal of patience. — Coriolanus II. i. 32. (こそ泥みたいなちよつとしたはずみのために、折角の忍耐も奪い去られてしまう。)

これらは life, occasion という抽象的概念を伝えるのに jewel, thief という具體物をもつてして、聞手に鮮やかな印象を與えようとする隱喩法によるものであるが、構造上 of に先立つ主要な位置を占めた jewel, thief は、同じ文脈中の casket, rob と關係し、全體として比喩的表現法が連續していることに注意される。今日の that fool of a man などは、このシェイクスピアの例ほど顯現的でない場合が多いけれども、修辭的には多かれ少なかれ、このような隱喩の意圖に添うものである。こうい

う隱喩的表現を形成する手段として用いられた of は、その本来の機能を失っている形式語としか解されないが、その點も現代的表現の多くの場合に通じている。

- (1) Onions, *A Shakespeare Glossary* s. v. or 6.
- (2) Schmidt, *Shakespeare-Lexicon* p. 796.
- (3) Abbott, *A Shakespearean Grammar* § 172.

IV

シェイクスピアからの例では、現代的表現に見られる特徴がかなりの程度に發揮されていることが知られるが、形式上で of の次に置かれる名詞に不定冠詞の付いた普通名詞が用いられていないところは、今日の "that fool of a man" 型と異なっている。意味上並びに外形上でこの型の表現が確立されるのは、シェイクスピアの時代を経た十七世紀の後半以後のことであるとは前にも述べたが、そういう例を觀察するに先立って、次に現代英語における傍系的現象として、of 以下の句に本来の機能が窺われる例を眺めてみようと思う。それはシェイクスピア以来の現象であり、これまで試みた通時的考察を共時的觀點から繰返すことになるが、問題の表現におけ

る of の本質と、of の前後に置かれる名詞の意味関係とに對する認識を、新たにしたいためである。問題の表現は、次に擧げような、その構造の論理性において數段階にわたる類似表現と漸層的に關連し、それらを経由して到達した極點であると言える。それは多かれ少なかれ發生的にも眺められる事實であつたが、記述的には一層明瞭に確認される。

まず of の後に構成の素材を表わす名詞を含む表現が、次第に反論理的と見なされる表現に推移して行く現象として、次の例が擧げられる。

(1) Here a river of bluebells poured down a slope of oaks and firs. On the edge of the beeches was a misty lake of forget-me-nots. Near it was a lake of red campions. A wide grassy path would be a lane of daisies that closed their eyes in the cold long before it was evening. — Lynd, “The Nightingale Arrives.” (目の前には一筋の川のようなつりがねずいせんが、かしたもみの立ち並ぶ斜面を流れるように連なっていた。おなの木立のおちには、一面ぼう々と霞んだ湖のようになすれなすりが咲いていた。その近くには、

これまた湖のような赤いひろはのまんでまが見えた。廣く草に覆われた小道はひなぎくの道だったが、それはこの寒さにまだ夕暮れにならぬうちに、眼をつむってしまったのだらう。)

斜字體の語群のうち、(a) a slope of oaks and firs, a lane of daisies は語義通りの意味を表わしており、of は素材の關係を示すものと解される。それに對し (b) a river of bluebells, a misty lake of forget-me-nots, a lake of red campions は隱喩的表現であるが、同じ文脈中で (a) からの推移が極めて自然であり、of の機能も (a) における of のそれに準じていることが知られよう。(a) ではそれぞれの花の集團をそのまゝ現實の「斜面」「小道」と表現し、(b) ではそれを外形上の類推から比喩的に「川」「湖」として表現しているという相違があるだけであり、素因とそれから集成された具體物との關係には變りがない。形式上から言えば、どちらも「單數普通名詞十の十複數普通名詞」の構造である。同型の例を今一つ擧げれば、

(2) The ground there was covered with a mist of bluebells, and nearly a score of crab-apple trees were

in full bloom.—Galsworthy, *The Apple-Tree* v. (こは一面霞のようなじりがねずいせんに覆われ、約二十本ものやまりんごが今を盛りに花をほこらばせていた。)

こゝでは主要語が *mist* で(1)の場合ほど具體性の多くない名詞であるが、「じりがねずいせん」の塊りを一體の「霞」と見立てた具象的表現法で、*of* が同じく素因を示すものと解されることは、こゝの *a mist of……* を(1)の *a misty lake of……* と比較してみても、領かれよう。同時に注意されることは、*of* の後の複数名詞 *bluebells* が數量的に漠然とした概念を傳えているが、それが主要語の *a mist* という一種の單位を示す表現によって明確にされていることである。このように數量的に特定な語を不定な語に對し、構造上主要語の位置に立てて、數量的限定を表現の軸とする語法は、*of* を媒介とする名詞群にかなり共通的に見られる特徴である。これは結局同じ文の *a score of crab-apple trees* に通じるものであるが、このことについてはまた後に觸れることとして、次に同じゴールズワージーの作品からの引用について、觀察を進めよう。

(3) ……and there rose the busy chatter of the little trout stream, whereon the moon was flinging glances through the bars of her tree-prison.—*Ibid.* vi. (すると例のますのいる小川の忙わしげなせゝら音が聞えてきた。水の上には月がその木々の牢獄のさん越しに微かな光を投げかけていた。)

(4) The moon had just risen, very golden, over the hill, and like a bright, powerful, watching spirit peered through the bars of an ash tree's half-naked boughs.—*Ibid.* vi. (月は黄金色に映えて丘の上に今しがた昇ったところで、まるで明るく強く下界を見そなわす精靈のように、とねりこの半ばあらわになった大枝のさんから光を放っていた。)

二文とも同様な場面の描寫に用いられた *the bars of……* という表現を含んでいるが、比喩の使い方が(4)が(3)よりも間接的である。もともと *bars* は月をとりこにしている牢獄のそれとして用いられており、その關係が(3)ではそのまゝ……*of her tree-prison* という表現で明らかにされている。(4)ではそれが無いため二重に隱喩的になつてゐる。結果としては、(3)の *of* は本來の所屬關係

(9) “that fool of a man” 及び類似表現について

を示すものであり、(4)の of はそれから轉じて、同格的と言えらる關係となつて現われている。(3)から(4)への推移が注意すべきであり、それははわれわれがⅠにおいて發生的に觀察した現象であつた。

以上は of の前後の名詞が共に具體物を表わす普通名詞の例であつたが、of の支配を受ける名詞が非可算的 (Uncountable) な抽象名詞か物質名詞の場合に、英語の統語法としての特徴が鮮明となる。次の二例における表現は、比喩的な要素を含んではないが、そういう特徴を端的に表わしているものとして、注意される。

(5) The Yukon lay a mile wide and hidden under three feet of ice. On top of this ice were as many feet of snow.—London, *To Build a Fire*. (マートン川は幅一マイルで、三フィートもある氷に覆われていた。その氷の上には更に三フィート程の雪が積もつてた。)

(6) She was what Dennis had vainly sought during a lonely year of exile.—Waugh, *The Loved One*. (彼女はデニスが孤獨な流浪生活の一年間にむなしく尋ね求めていたものだった。)

(5) の three feet of ice, as many feet of snow は、意味上の核心は明らかに ice, snow であるから、意味に則した構造としては、ice of three feet, snow of as many feet が考えられる。しかしこのような文脈でもとの表現が選ばれるのは、本來概念的で無限定な物質を量的に限定し具象化して表現しようとする語法によるもので、それは廣く a piece of chalk, a glass of wine, a spoonful of sugar などに通じて見られる現象である。この語法における of は、發生的にはやはり屬格の機能を受継いでいるが、それは部分關係を示すものに由來する。現に言語の屈折的構造段階にあるラテン語では、英語の a glass of wine に當る表現は poculum vini 又は vinum (= wine) の屬格形 vini を用ゐる。この poculum vini に相當する分析的表現が英語の a glass of wine ということになるが、その本來の意味は、「一般におどろ酒なるものうちの一杯分」というのであり、實質の意味關係よりも外的な量の明確度を機軸とした素朴な表現法である。今日普通には of のこのような機能が意識されておらず、それは單に二つの名詞の並列を避けるために介在する無意味な形式語と感ぜられている。現

にそういう語感は、ドイツ語の場合、*ein Glas Wein* に
よって、外形上に反映されている。こゝでは *ein Glas*
と *Wein* とが「同格」に配合されていると言えるので
あるが、同格とは構造上のことで意味上の關係をいうも
のではないことに注意しなければならない。英語の場
合、*a glass of wine* と構造上で *of* が保留されている
以上、「同格」とは言えない道理である。英語でも數量的
表現に、(a) *thousands of people* に對し (b) *a thou-*
sand people, (a) *dozens of eggs* に對し (b) *two doz-*
en eggs, あるいは用例(2)におけるような (a) *a score*
of crab-apple trees に對し (b) *three score years* な
どのように、それぞれ (a)(b) 二様の表現が行われている。
兩者の間には實際上の用法において相違があり、對等に
比較され得ないけれども、構造發達の上からは、(b) が (a)
の後の段階にあるものと言える。(a) では起原的な部分屬
格の痕跡を外形上に留める *of* を介在させているが、(b)
では、そういう *of* が起原的の機能の弱化に伴ない脱落
し、前後の名詞が同格的に並置された形式となって現わ
れている。結果としては (b) の *thousand*, *dozen*, *score*
は數の單位を示す純然たる形容詞と見做されるようにな

っているが、機能の變遷に従い、構造の合理化へ赴いた
當然な推移と言ふべきであろう。

(6) における *a lonely year of exile* は、主要語が時
間の單位を示す *year* であるが、これも (5) におけるよう
な數量的表現に準じて考えられる。こゝでは *a lonely*
year of exile は *a lonely year's exile* と言葉換えてみ
ることができ、これだけ切離して見た限りでは、後者の
方が意味の關係に則應した表現である。しかし原文の文
脈では語群全體が前置詞 *during* の支配を受け、期間を
表面に浮き出す簡潔な表現を成立させている。このよう
に數量的内部區分のない事態や情況を數的內部區分の明
確な期間に割り振り、それによって具體化する表現法
は、現代英語の印象的文體に好まれるものである。他の
例で言えば、(a) *There was a moment's silence.* と
(b) *There was a moment of silence.* とは、今日とち
らも見られる表現であるが、(b) の *a moment of silence*
が (a) の *a moment's silence* よりも具象的であり、*there*
was という存在表現に端的に適應しており、聞手の論理
的了解には抵抗を生じさせるけれども、それだけかえつ
て印象的效果を加えるものである。そして發生的には、

(11) “that fool of a man” 及び類似表現について

a moment of silence の #d a year of exile の
その of は a foot of ice のそれと同様、部分属格の機能
能を引継ぐ of の系列に属するものと解されるのである。

次に同じ「具體名詞 + of + 抽象 (または物質) 名詞」
の形式でありながら、具體名詞に比喩的意味が含蓄され
る例を擧げよう。

(7) It was the time to lie snug in a hole in the
snow and wait for a curtain of cloud to be drawn
across the face of outer space whence this cold
came.—London, *Ibid.* (今は雪の穴に心地よく横たわ
り、とばりのような雲がこの寒氣のもとである外空の面
を覆ひ隠すようになるまで待つておるべき時なのだ。)

(8) When the bank on the other side of the draw
began to throw a narrow shelf of shadow, we knew
we ought to be starting homeward.—Cather, *My
Antonia* I. vi. (盆地の向こう側の土手が狭いたなのよ
うな影を投げ掛け始めるころ、私たちはもうそろそろ家
に歸る時間になったと思った。)

(9) I went in and out, as I followed it (= the

road), from bays of shadow into promontories of af-
ternoon sun.—Stevenson, *Travels with a Donkey.*
(私はその道を、灣のような日陰から岬のような午後
日向へと、あるいは出あるいは入りしながら、辿って行
った。)

これらの例における斜字體の部分は、形式上では用例
(5)(6)におけるものの型に属しながら、意味上では用例(1)
(2)におけるものに準じている。それぞれ漠然とした不定
な形状をもつ物質としての cloud, shadow, sun が明確
な形状をもつ具體物である curtain, shelf, bays, pro-
montories のわく内に限定させられている表現法であ
るが、後者はいずれも隱喩的に用いた名詞である。(7)で
は a curtain における隱喩はそれに對する意味上の述語
である be drawn across に連続してなり、(8)では a
shelf における隱喩が前の名詞 (the) bank と關連して
用いられている。(9)は十九世紀からの用例であるが、特
色の濃いものであり、特に(8)におけると同じ shadow が
一層強度な隱喩を含む表現内に現われている關係上、對
照のため取上げたものである。bays や promontories
という名詞が、敘述されている場面の情景を暗示し得る

ように選ばれていることは、言うまでもない。

これらの表現に見られる隠喩法に關して連想されるのは、日本語の文語で言う「露の命」「玉の肌」あるいは「山なす大波」「瀧なす汗」などの表現法である。いかにも「山なす大波」は英語の a mountain of waves に對應する。けれども構造上でも比喩の性質の點でも兩者は本質的に異なっている。「露の命」にしても「山なす大波」にしても、日本語の場合には構造が論理に則している。意味上の核心がそのまま構造上でも「命」「大波」で、主要語の位置にあり、形容句の「露の」「山なす」は意味上でも從屬的要素である。また英語の a mountain of waves では、比喩が構造上の主要語である mountain の中にこめられているが、日本語の「山なす大波」では、それが接尾語の「なす」によって直接に表わされている。「なす」は大言海(富山房)によれば「似す」の轉化と推定されている。従つて「山なす大波」は、むしろ waves as high as a mountain に對應すべき構造であり、「なす」によつて表わされる比喩は直喩であり、a mountain of waves に見られるような隱喩とは異質的なものであることが知られる。「露の命」の「の」も、それ自體「の

如き」という比喩的意味を表わす助詞である。「なす」が直喩的であるのに比べ、「の」は隱喩的であり、その點英語の the jewel of life などの of の語感に近いように思われるが、「露の」と名詞に連なつて直行的に比喩の句を構成する點は、of life の場合には考えられない。要するにこのような彼我の差は、分析語と膠着語という根本的相違に歸着するけれども、英語の構造に内在する反論理的ではあるが、それだけ自由で潛勢的な表現上の特質が、改めて認識させられる。

次に of の次に來る名詞が不定冠詞の付く普通名詞となる一種の慣用的表現法に注意を向けよう。表題に掲げた that fool of a man と、形式上の特徴を一にするものである。

(10) For one who has so chosen his house the lighting of the first fire is something of a ceremony. — Milne, *If I May*. (こんな具合にして自分の家を選んだ者にとつては、初めに火を起すという事は、何か儀式がかつたものと思われる。)

(11) It was not much of a room, and there was not much in it except Jimmy Counter, smoking a

(13) “that fool of a man” 及び類似表現について

pipe and writing furiously. — Galsworthy, *Con-science*. (そこは大して部屋と言ふほどのものでもなかった。中には煙草をふかしながら書きまくっているジミ・カウンター以外には何も大してなかったのだ。)

(12) Each of us would think the other a bit of a bore, and our wives would wonder why we had ever been friends at Liverpool. — Milne, *Tid*. (相互相手をちょっと退屈な男みたいに考え、細君同士はよくもリパブルで二人が友だちであったものだと思う位だった。)

これらの表現では、主要語の位置にある something, more, a bit がそれぞれ of の次の名詞が普通にもつ定義を質的に限定しており、結局後者に對し修飾的關係のものとなって現われている。しかし本来、something, more, a bit はいずれも分量を示す語で、of に續く名詞のもつ全體的な意味の内包のうち、そのある部分を表わすように用いられたものである。このような本来の量の限定が比喩的に質の限定に轉じたわけであるが、この過程が期せずして用例(11)の中に現われている。問題の much が、すぐ後の文脈中に there was not much……

と繰返されているが、前の much に潜在する分量の意が、後の much に幾分顯現的に露呈させられている現象である。こゝまで述べて來ると、この表現における前置詞 of と、それからその支配を受ける普通名詞に付く不定冠詞とが、いかなる機能のものであるかということには、自ずと明らかになる。of は部分關係を示し、不定冠詞は種屬一般を指す總稱的なものであり、much of a room は「およそ部屋と名付けられる物のうちの多くの部分」というのが、原義であったと解される。(12)の a bit of a bore も、of の後に非可算語の續く a bit of wood や、あるいは先きに觸れた a glass of wine などと比較されるべきであり、この構造本来の意味關係が會得されなければならない。

用例(10)(11)(12)における種類の表現は、意味の上から表題の that fool of a man とむしろかけ離れているように見えるけれども、實は兩者は本質的に關連の深いものであることが知られよう。後者における of の起原については、既にⅡで述べたが、不定冠詞の用法の上でも兩者は正しく共通している。後者の用例については章を改めて觀察するが、こゝに二種類の表現の關連性を實證する

一例を掲げることとする。

(13) "Yuh, but you aren't much of a physician yet. You're just getting your toes in."

"I'm one hell of a good physician!"

—S. Lewis, *Arrowsmith* XIV. 1.

「だがね、君なんかまだ醫者の卵だよ。この間始めたばかりのくせに。「なに、こゝろ見えても、ちゃんとした一人前の醫者だぞ。」

この會話文における初めの *much of a physician* は (11) におけるものと同類であり、後の *one hell of a good physician* が主題としている表現に當るが、兩者の間の關連が實に緊密なものであることに注意されよう。

(1) 古く中高ドイツ語期(一一〇〇—一五〇〇)には、*Glas* などに續く名詞は屬格で、*ein glas wazgers* (〈ein *Glas Wasser*), *ein stücke brödes* (〈ein *Stücke Brot*) のように用いられた(相良守峯「ドイツ語學概論」一四四頁)。カーク (*A Grammar of the German Language* § 94. 3A) によれば、今日でも屬格を用いた *ein Glas guten Weins* (〈*guten Wein*) のような表現は、精練された語法には見られるという。

(2) 英語の屈折構造が既に可成りの程度に分析化していた十四世紀にフランス語から入った *dozen* には、後に屬格

を從える例は見られながら、*thousand* や *score* は古英語期には "*fi füsendu manna*" (= five thousand men) (*John vi. 10*), "*viii score accere*" (= eight score of fields) (*Records of Bury St. Edmunds* [ca. 1100: OED]) のように、屬格複數形の名詞と共に用いられた。例へば *manna* は *mann* の *accere* (〈acc. str.) は *accere* のそれぞれ屬格複數形である。

V

近世英語の特に口語體に目覺ましく發達した *that fool of a man* の類の表現で、*of* は本來所屬關係(量的に還元して言えば、部分關係)を示し、後の *man* にく不定冠詞は種屬一般を代表させる總稱的機能をもつものである。従つて *of* の前の *fool* よりも後の *man* の方が廣範な意味の内包を有する名詞であることが理解される。前者は後者に歸せられるべき屬性や特質を濃厚に備えた典型的な人や物を表わす語であるが、論理的に兩者の意味關係を言へば、前者は種概念 (*Species*) を表わし、後者は類概念 (*Genus*) を表わす語とすることになる。 *man* という類のうちには *fool* という種が含まれるのであり、單に「同格」というのは當らないはずである。

(15) “that fool of a man” 及び類似表現について

しかし一般には、*of* は無意味な形式語として對等な意味關係にある二つの名詞にはさまれたものに過ぎないという意識のあることは否めない。注意すべきなのは、ドイツ語で *ein alter Schelm von einem Lohnbedienten* (= an old rogue of a servant) と言う時には英語の表現に正確に對應するが、また *von* の後の不定冠詞を省き、*ein alter Schelm von Lohnbedienter* と、異例的に前置詞の支配を脱した主格を用いて言うことがある⁽²⁾。ドイツ語の場合、英語とは違って、形態上の制約を考慮に入れなければならないけれども、*von Lohnbedienter* という破格用法には、この表現に伴なう同格という通俗な言語意識が構造形式の上にも及ぼした影響の跡を見ることが出来る。

既に述べたように英語の表現の發達に影響を與えたフランス語には、當然同種の構造が数多く見られる。例えば *un fripon d'enfant* (= a rogue of a child), *non coquin de valet* (= my rascal of a servant), *ce diable d'homme* (= that devil of a man), *cet imbecile de jardinier* (= that fool of a gardener) などである。たゞ英語の場合と比べ、前置詞 *de* に續く名詞に冠詞が

付いていない點が異なっている。これは英語とフランス語との間における冠詞の慣用の相違に起因するものとも思われるが、同時に次の點も見逃すことができない。フランス語の表現では、例えば *fripon d'enfant* という語群が一つの分ち難い單位に感ぜられ、始めの冠詞 *un* (またはそれに相當する代名形容詞) がその總體に附着しているという語感が伴っている。この點、英語の *a rogue of a child* は起原的な意味關係を一層忠實に構造面に反映させているものと言える。注目されるのは、*le diable* が *ce diable d'homme* を “*Quel diable que cet homme !*” (*cf. What a devil that man is !*) のような文の表現に對應する縮約形と説いていることである。これはわれわれがこれまで試みた發生的考察とは違つた、心理的觀點に立つ見解であるが、特に慣用化の進んだフランス語の場合、極めて示唆的な説と思われ⁽³⁾。これによれば *homme* が心理的主語で、*diable* が強調された心理的述語となり、*de* は主格關係を示すものといふことになる。*de* の本質に對する解釋の當否は別として、この表現が嘲罵などの情意を吐露する場合に用いられることの多い特徴に鑑み、これを一種の情意表

現の昌化と見做すことは、確かに英語の場合にも當てはめられる。

次に近代英語におけるこの表現を具體的な用例について眺めて、その意味の特徴と文體上の價值を實地に探つてみたいと思う。歴史的に最も早い用例としては、OEDが一六六三年の Butler, *Hudibras* から引用している“a strange riddle of a lady”(不思議な謎の婦人)が挙げられるが、十七世紀の後半から十八世紀にかけての用例は實際に少なく、これがその特色を十分に發揮して多くの作家に用いられるようになったのは、まず十九世紀以後と言つてよい。以下の引用は筆者の記録にある十九・二十世紀の例から選んだものであるが、意味上から輕蔑や罵詈の表現が一つの特徴をなしているので、先きにそれ以外の意味のものから擧げることとした。

(1) *A monster of a bee had been wandering over-head,—buzz, buzz, buzz.—Hawthorne, David Swan.* (とつとつもなく大きな蜂が、*ぶん、ぶん、ぶん*と頭の上を舞ひ續けてゐた。)

(2) *He……looked at Antonia with a wintry flicker of a smile and began to tell her something.——*

Cather, My Antonia I. vi. (彼はほのかにちらめく冷たい笑を浮べながらアントニヤを眺め、何かを話し出すのだった。)

(3) *Miriam kept up her music while she guarded her father—a dumpling of a girl, holy fire behind the deceptive flesh.—S. Lewis, Arrowsmith* XXXVI. v. (ミリアムは父の面倒を見るかたわら、音樂の勉強を續けていた、偽りの肉體の陰に聖火を宿してゐると言つたほつてりした少女なのだ。)

(4) *Ashurst put his finger to the mouth of the little brown bull-frog of a creature in her arms.—Galsworthy, The Apple-Tree* v. (マンシャーストは彼女の腕に抱かれてゐる小さな茶色のうしがえるみたいな子犬の口元に指を觸れた。)

(5) *All the while the dog sat in the snow, its wolf-brush of a tail curled around warmly over its forefeet, its sharp wolf-ears pricked forward intently as it watched the man.—London, To Build a Fire.*

(その犬が雪の上に腰を据えたまま、房々したきつねの尾のような尻尾をぬくぬくと前足に巻き、鋭いきつねの

(17) “that fool of a man” 及び類似表現について

ような耳をじっとそば立てながら、この男を見詰めていた。)。

一體に斜字體の部分は、物や人あるいは動作に對する具象的で生彩に富む形容が見られ、主觀性の色の鮮やかな表現であることに氣付かれよう。特に文脈上注意されるのは(3)で、*a dumping of a girl* 以下文末までの部分は主語の *Miriam* に對する隱喩に貫かれた同格的敘述であり、問題の表現にふさわしい文體が醸成されている。なお(5)では、*its wolf-brush of a tail* における強調的隱喩が後の *its wolf-ears* によって、もっと端的な形式で絡脈が保たれている。

上の(3)における *a dumping of a girl* は、幾分諧謔的文調の中に親愛の情を淨き立たせているが、また同じ表現はその場面によって、容易に輕蔑の意を表わすようになる。次に輕蔑を表わしているものの用例を擧げるが、上の(3)は特に(6)と比較されるべきである。

(6) But fancy Caroline travelling across the continent of Europe with a *chit of a girl*, who will be more of a charge than an assistance!——Hardy, *Alicia's Diary* vii. (やれどじつめ手助けにならぬとじつ

よりは手足纏いになるばかりの、いたいけな小娘一人を伴なつて、カロラインがヨーロッパを旅行するなんて、どんなものでしょう。)

(7) Then he turned down the lane, and stood leaning on the orchard gate——*grey skeleton of a gate*, as then.——Galsworthy, *The Apple-Tree* viii. (それから小道を曲って行き、果樹園の門により掛かった。あの時同様、色のくすんだ骸骨同然の門に。)

(8) The witnesses, Andrey's brother and brother's wife;……said they couldn't wait two hours in *that hole of a place*, wishing to get home to Longpuddle before dinner-time.——Hardy, *A Few Crusted Characters*. (立會人のアンドレーの兄夫婦は、こんなむさ苦しい所に二時間も待つのは御免だ、夕食時前までにロングプドルに歸りたい、と言った。)

(9) A hungry crowd of shipwrights sharpened their chisels at the sight of *that carcass of a ship*.——Conrad, *Youth*. (餓えた一群れの船大工たちがあの骸骨やみなからの船を見やりながら、のみを研いでいた。)

(10) Now, look here——*this infernal lazy scoundrel*

of a caretaker has gone to sleep again—curse him.
—Ibid. (ところがね、この仕様のないぐうたら番人の奴がまた寝入っちゃったのだ、いまいましい奴。)

(11) I'm her father, and I shall give her away, or there'll be a hell of a row, I can assure 'ee!—Hardy, *A Tragedy of Two Ambitions* iv. (あれは俺の子なんだから、俺が嫁がせない日には、とんでもない騒ぎが起るに、きまってるよ。)

(6)で a chit of a girl は更に追敘的な關係詞節に續けられ、(7)の grey skeleton of a gate が前の the orchard gate の同格に置かれているのは、やはりこれらの表現自体のもつ直截的口調を助成している文脈である。(なお(6)の more of a charge……はⅣ(11)におけるものに類する。)(10)(11)では輕蔑の意が嵩じて惡罵の調子を帯びるものとなっている。特に(11)の a hell of a……は、Ⅳ(13)にも類型が見られたが、卑俗文體特有の慣用的表現を成している。このような口語調の侮蔑や惡罵の意を含む慣用法としては、更に次に例示する……fool of a……,……devil of a……の類型がある。

(12) But what the young ass of a novelist could

not see……was that he also was priding himself, and quite as stupidly, on the mere accident of birth.—Chesterton, *As I Was Saying*. (しかしこのおめでたい若僧の小説家が氣付いていないことは、自分もまた出生という單なる偶然事を鼻に掛けている馬鹿を加減にかけては、ちっとも變りがないということである。)

(13) ……in this case it seems to be only five men—you, I, Johnnie, old Scully, and that fool of an unfortunate gambler came merely as a culmination, the apex of a human movement, and gets all the punishment.—Crane, *The Blue Hotel* ix. (今度の事件には五人の男しかいないようだ、君と俺とジョニーとスカリ爺と、それからあの可哀そうな腦足りんのほくち打ちが、最後の仕上げに——人間活動の絶頂として——やって來、場句にごっそり罰をくらったわけさ。)

(14) Chips, old boy, I hear you've been having the deuce of a row with Ralston.—Hilton, *Good-Bye, Mr. Chips* xi. (ね、チップスさん、ロールトンとぶえら騒動を始めたそうじゃないですか。)

(15) Besides, there's that cold, proud devil of a son,

(19) “that fool of a man” 及び類似表現について

who said……—G. Eliot, *The Mill on the Floss* VI.
viii. (おまけにこんな冷淡な高慢ちきな息子の奴がい
つ、……と言ふおる。)

いずれもきびきびした口語調の例であるが、特に(13)では、*that fool of an unfortunate gambler* が前後の構造の間で、二重の機能を果しており、口語色の濃い破格構文の中に現われている。表現自體として、(15)における *devil of a son* は日本語の「息子の奴」に相當する。ただ日本語の場合は、局部的な情意表現に留まっているが、英語の表現は一般的な慣用法に確立されている點が異なっている。

以上(1)から(15)までの用例を通過して、形式上で、ofの前の主要語に指示的または記述的な形容詞が一個またはそれ以上付いているものが多く、それにひきかえ、ofに導かれる付加語は、(13)を除きすべて、不定冠詞を添えた單獨形で用いられていることに、注意される。形容詞が主要語に付けられるということは、それだけ隠喩の對象に取上げられた名詞のもつ生々しい印象と描寫力をおお一層強化することであり、感情的表現としての効果を鮮明にしている。特に(8)(9)(13)(15)に用いられている *that* は、

主観的な強調語として、この種の表現を特徴付けるものである。感情的な主要語に對し、理知的要素としての付加語は、單獨に言い切った語調で力強く抑えられている呼吸にも、注意が必要である。その前に付く不定冠詞は類概念を指す總稱的機能のものであることは既に述べたが、それが上の例にあるように普通名詞の場合だけでなく、*Thackeray, Vanity Fair* の “that clever little wretch of a Rebecca” (あの利口者のこまちゃくれたリベッカ) のように、固有名詞にまで添えられるのが、普通である。a Rebecca は「リベッカ」なる具體的な女性を、一旦「リベッカという人」と概念化した上での發言であるが、特殊な強意表現のもつ慣用の根強さを物語るものである。

このような形式上の特徴は意味上の特徴の反映に他ならない。この表現に伴ない勝ちな極端で誇張的な語氣が、しばしば粗野な嘲罵の表現に赴かせるけれども、抽象的な屬性を述べるのに明確な具象物をもってするこの名詞構造は、特に印象的で生彩に富む現代英語の口語體に、益々伸長して行く可能性をもつものと思われる。われわれがこれまで行った英語の統語法の一環としての觀

察が、こういう推測を裏書きしている。

- (1) 石橋幸太郎「英文法とこころこころ」一三八頁。
- (2) Jespersen, *A Mod. Eng. Gram.* III. § 154. なお Curme, *A Gram. of the Germ. Lang.* § 94.5 には “ein armer Teufel von *Philologe*” (Schücking), “eine Seele von *Mensch*” (Gustaf Krüger) のような例が擧げられている。

(3) Regula, *Grundlegung und Grundprobleme der Syntax* p. 100f. なお英語の “Oh, pity me, miserable wretch that I am ! — I dared not.” (Poe, *The Fall of the House of Usher*) のような詠嘆的な同格表現が比較される。

(一橋大學助教授)